

令和 5 年 5 月 21 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00315

研究課題名（和文）室町の学問の一齣として見る三国志享受の様相 中世日本紀・日本紀注釈との接点

研究課題名（英文）A study on the influence of Sanguo-zhi on Japanese literature and culture in the Muromachi Period

研究代表者

田中 尚子（TANAKA, NAOKO）

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：50551016

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では『三国志演義』が室町期に日本に入ってきた可能性について、これまで取り組んできた「日本における三国志享受の通史的把握」の観点から考察した。日本での三国志享受において重要な役割を果たしたのが室町期の学問で、中国史書や儒学への学びが積極的になされたことで、魏蜀の正統論や、理想的臣下の象徴としての諸葛孔明が注目されるようになり、それが南北朝時代との重ね合わせを生んだ。同時に、室町期の学問では日本紀注釈も大きな位置を占めており、そこで取り上げられる神功皇后の三韓征伐が三国時代に当たることから、この2つの時代が関連付けて解釈された可能性が高いことから、両者の接点について、検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

三国志享受の問題について取り組んでいる研究者の数は、その重要性に比してきわめて少ない。取り組む人数の少なさが実態解明に時間がかかっている遠因ではあり、三国志享受研究の裾野を拡大するべく発信する役割を果たさねばという思いがある。その際、本研究が文学、史学、思想等様々な研究領域において貢献が可能となることも伝えていく必要があるとの思いで取り組んできた。本研究の遂行は周辺の研究領域との連携を図る重要性を伝えるモデルケースとなったと確信する。

三国志享受は日本だけの関心事ではない。本国中国はもちろん、韓国でも注目されている。本研究課題はそういった国際的な研究動向にも一石を投じることとなると考える。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I considered the possibility that "Romance of the Three Kingdoms" came to Japan in the Muromachi period, by further delving into "comprehensive understanding of the enjoyment of Sanguozhi in Japan". Learning in the Muromachi period played an important role in the enjoyment of Sanguozhi in Japan. Argument on legitimacy of either Wei or Shu, came to attract attention, and this gave rise to the overlap Sanguo era with the period of the Northern and Southern Dynasties. At the same time, the commentary on the Nihongi, which descended from the Chusei-Nihongi, also occupied a large position in the learning in the Muromachi period, and owing to this, the time of Empress Jingu's conquest of Three Koreas corresponds to the Sanguo era. And there is no wonder that we associate with these two era and "Nihon-shoki" and "Sangozhi", so I investigated how these two era and these two texts have the strong connection between each other.

研究分野：日本文学

キーワード：室町 学問 注釈 三国志 日本紀 和漢比較

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 前提とされる時代の重なり

日本で三国志が享受された一要因として、正統問題が取り沙汰される南北朝時代と三国時代との類似性があったのは間違いない。南北朝にとって三国時代は先行する時代であり、だからこそ、その類似する部分を比喻・準えとして利用するようになっていったのである。しかし、重ね合わせという点では、この南北朝以外にも三国時代と並べるべき時代があったのではないだろうか。それが三国時代（184～208）と横並びにできる時代、すなわち『日本書紀』等に記される時代である。

ここで注目されるのが、近世の読本作家である都賀庭鐘が記した『呉服文織時代三国志』（安永10〈1781〉年刊行）である。物語自体は三国志にも登場する人物たちが兵法を手に入れるべく中国と日本を行き来するなど、近世期の作品にありがちな“荒唐無稽”な展開ではあるものの、三国時代と神功皇后の三韓征伐を同時代のこととして扱っており、また「三種の神器」と「伝国璽」との重ね合わせなど中世日本紀や日本紀注釈に見られる理解とも通ずる内容が記される。庭鐘が読本作家であると同時に儒学者としても評価される人物であったことを考慮すれば（彼にはこの他、医師としての側面も有する）、室町の学問成果が彼の作品に反映されていたと推測してもあながち無謀ではあるまい。

筆者は、本研究課題に着手する以前に、室町の学者たちの学問事情を解明するべく、すでに当時の日記・記録類や御成敗式目注など漢籍以外の文献も考察の対象としてきており、部分的にはあるが中世日本紀や日本紀注釈についても考えてきてはいた。言ってみれば、本研究の土台となる部分はある程度整備できていたということである。これまでの研究成果を活かしつつ、室町の学問事情と三国志享受とを改めて有機的に関連付けて考察していくことを目的として本研究を開始させた次第である。

### (2) これまで行ってきた研究

筆者自身がこれまで行ってきた研究は、大きく分類すれば、

- ① 日本の軍記物語と『三国志演義』の比較
- ② 日本における三国志享受の通史の様相の把握
- ③ 室町期の学問状況と学者ネットワークの構築

の3点にまとめられる。①のごとき対比研究を行うためには、②の享受研究がその前提条件として必要になるのであって、故に①・②両方の成果を重ね合わせることで、日本における三国志享受の在り方を立体的に示すことが可能となる。

そして、その研究成果と部分的に重なる形で成立するのが③である。②のテーマに取り組む中で、室町から江戸初期にかけての学者たちの影響力の大きさが明らかになってきたため、敢えて三国志という枠を外し、当該時期の学者達の日記や彼らが記した多岐にわたるジャンルの抄物・注釈書類の検討を行ってきた。五山僧や公家学者、医者たちの交流の様を辿ることで、学問環境や学者達の人的ネットワークの構築が可能になると考えての取り組みである。

それら一連の成果は、主に『三国志享受史論考』（汲古書院、2007）、『室町の学問と知の継承移行期における正統への志向』（勉誠出版、2017）の2冊の単著としてまとめた通りである。

ジャンルや時代の枠を越え、幅広い視野で行う研究というものは、その重要性は認められつつも、実際にはなかなか進んでいないのが現状で、学問や注釈の領域でもいまだそれぞれのジャンルごと、時代ごとに行われることの方が多い。しかし、上記の①～③の研究過程がすべて連続し、相互に影響し合っていることが浮かび上がってきていることから明らかなように、ジャンルや時代で区切らない研究に意味があるのは間違いない。

本研究課題で重点的に取り組もうとしたのが、③のさらなる掘り下げ、そしてその成果をもっての再度②の捉え直しである。つまり、本研究の遂行によって示される成果は、日本における三国志享受の様相の把握とともに、中世日本紀、日本紀注釈、ひいては室町の学問事情の解明を可能にするものであり、室町期に取り扱われた数多くの領域にそれぞれに対して相当の貢献が可能になると考える。

## 2. 研究の目的

### (1) 『三国志演義』流入の時期

『三国志演義』はいつ日本に入ってきたのか、この問いに対する解答は実はいまだもって提示されていない。現在、ゲームや漫画、映画等様々なツールを介して日本に広く浸透している三国志であるにも関わらず、その出発点は定かでなく、おそらくは江戸前期に流入したのだらうといった推論のもとに、我が国における『三国志演義』享受の問題は語られる状態だったのである。

その中であって、長尾直茂氏が『本邦における三国志演義受容の諸相』（勉誠出版、2019）を公刊し、室町期の段階で『三国志演義』が入ってきている可能性を示唆した。残念ながら、その著書の中でもまだ明確な回答は示されていないわけだが、とはいえ、本書の登場によって、室町期を視野に入れた考察の重要性に関しては、一定の理解を得たものと思われる。

長尾氏の呈示した説は、筆者がこれまで行ってきた三国志享受史研究（※ここでいう三国志は『三国志演義』に限定せず、三国志言説一般を示す）において、室町期の学問世界が重要な役割を果たしていると主張してきたこととも呼応する。すなわち、室町期の五山僧や公家学者が、儒学を学ぶ上で中国史書に関心を持つようになり、そこで得た知識が再度儒学へと還元され、正統論や理想的君臣関係がより一層強調されていく様を明らかにした筆者の研究からしても、三国志享受を考える際に室町という時代が鍵となるのは確実なのである。ただし、筆者はこれまでは室町期での『三国志演義』流入を想定してこなかったため、この問題を踏まえつつ、改めて室町期の三国志受容を検証する必要があると考える。

## （2）三国志と日本紀注釈との接点

もっとも、筆者自身としては『三国志演義』流入時期の検討に先立って解明すべき課題があると考えている。それは三国志享受と日本紀注釈との接点である。これまでの筆者のスタンスとしては、乱世という時代性と正統論という儒学的思想・学問との観点にもとづいての南北朝時代と三国時代との重ね合わせが、三国志享受を形成したというものであった。

しかし、三国時代と同時期にあたる2世紀頃の日本も、南北朝同様に重ね合わせられた可能性が考えられる。そもそも『日本書紀』の構成自体、史書『三国志』の影響を受けているといった説も存在し、また『日本書紀』の叙述内容に目を向けてみれば、それこそ神功皇后の三韓征伐の話があり、その三韓征伐に関しては『神皇正統記』などでも、その叙述直後に同時代のこととして三国に言及するのである。中世日本紀から日本紀注釈へと展開していく日本の上代・神話に対する解釈が、室町期の学問行為の中で重視されていたことは言うまでもない。だとすれば、室町の学問においてともに注目される日本紀注釈と三国志享受との接点を探る作業は、室町の学問の実態を解明する上でも意味を持つてくるのではないだろうか。

## 3. 研究の方法

### （1）室町期の日記・記録類、抄物・注釈書類に記される三国志に関する言説の整理

一つ目の方法は、室町期の日記・記録類、抄物・注釈書類内に見える三国志関連叙述の抽出及びそれらの整理である。三国志に限定せず、他の漢籍に対する叙述も考察対象とし、三国志享受の相対化をはかる。この作業は筆者が長期的に取り組んできているものだが、いまだ不十分であり、より多くの事例を集める必要があるため、扱う対象とする文献や人物を増やしていく。これまでは主に五山僧と清原家（中でも宣賢）における漢籍享受を中心に考察してきたが、一条家や三条西家、そして吉田家といった他の家、さらには戦国武将、医師、商人といった五山僧と公家学者の周縁の人物をも視野に入れた検討へと拡大させていきたい。

尚、『三国志演義』流入時期の確定といった観点からすれば、長尾氏が指摘した室町期の学問への通俗小説、平話類の影響についても注視しておく必要があり、この点は、自身にとっては新たな試みである。これらの作業の中で、どういったテキストがどの学者間で共有されるのか、学問に関わる人物たちのネットワークの解明に挑む。この方法において学者間での学説の伝播・継承の様を明らかにすることが、以下の（2）で効果的に働くことになる。

### （2）中世日本紀、日本紀注釈と三国志享受との接点の検討

中世日本紀や日本紀注釈に関する研究は、文学・思想・史学など様々な分野で扱われることで進化を遂げてきた。その成果を押さえつつ、自身では日本紀の家と言われる吉田家や同家と強い繋がりのある清原家の活動を中心に検討する。中世日本紀では三種の神器や神功皇后の三韓征伐に関連して神や神話を持ち出した解釈を生み出し、皇統ひいては国の正統性を主張する。それと同様のことが三国時代に見出せ、伝国璽という皇位の象徴が重視されている。そもそも三国時代は三韓征伐の時期に相当するのである。そこで吉田家や清原家で日本の神話、歴史の理解に三国志がいかに使われていくのかを考察する。これによって、日本紀注釈、漢籍享受双方の面で、新知見を提示することが可能になるはずである。

尚、吉田家の資料としては、本務校である愛媛大学附属図書館には「鈴鹿文庫」として吉田家に関連する資料が蔵されている。当該文庫の調査が日本紀注釈の研究自体を大きく進めることになるだろう。また清原家が中国の通俗小説を自家の学問に利用していたことが長尾氏によって指摘されていることから、清原家周辺の学問事情を検討していく中で、『三国志演義』流入時期を考える手がかりを見出せるであろうとの見通しを持っている。

### (3) 三国志享受に関する国際研究会・シンポジウムの開催

3つ目は、先の2つとは異なったアプローチとなる。三国志享受については日本だけで関心が持たれているわけではなく、当然本国中国でも取り上げられる。そして、三国志は関羽信仰などを軸にアジア全般に広まっている上、韓国では古くから『三国志演義』の刊行がなされ、それが日本の江戸時代での三国志享受にも影響を与えていたようでもある。アジア各国で、それぞれの文化的・社会的背景のもとに三国志が享受されていたのは間違いない。だとすれば、国際的規模での考察によって、日本での享受の特徴、独自性を浮き彫りにできるのではないだろうか。そこで本研究のポイントの1つとして、国際研究会・シンポジウムの開催を掲げたい。これは自身の研究テーマの国際化、共同研究化の促進力となることだろう。

尚、研究会・シンポジウム開催にあたっては、アジア古代史領域において国内外からその研究が評価される藤田勝久愛媛大学名誉教授の助力を約束してもらっており、藤田氏がこれまで連携をとってきた中国の復旦大学の陳正宏氏、南京師範大の趙生群氏、陝西師範大学の張新科氏などの協力を仰げることになっている。また韓国の研究者にも働きかけることも可能とのことである。歴史領域において国際規模でアジア古代史、そしてその享受史を解明するグループの活動に、自身の文学領域の研究を持ち込むことで、国や研究領域の境界を乗り越えたビッグプロジェクトとして、三国志享受に関する研究が実現するのである。

これら3点の課題を遂行することで、三国志享受の様相の把握、その背景にある室町期の学問の実態解明を目指す。そしてその作業の延長線上に、三国志受容における最大の謎である『三国志演義』の流入時期の解明があると考えている。

## 4. 研究成果

### (1) 三国志享受の問題

三国志享受の様相について、室町期に成立した『三国伝記』という説話集の中に収められた孫鍾の逸話に焦点を当てて考察し、そこから当該期における三国志受容の一齣を明らかにした。その成果は『三国伝記』が伝える室町期の三国志受容(『アジア遊学 室町前期の文化・社会・宗教』(勉誠出版、2021年11月)にまとめた通りである。

本稿では『三国志』のみならず、『宋書』などそれ以降に成立する史書内に引用される三国志言説を引用するなどしており、単一的ではない三国志享受の様が示せたかと思う。この視点が、次の科研費研究課題「室町期の学者による中国史書研究の様相—二十一史享受に窺える自国の歴史認識の変遷—」(基盤研究(C) 2023年4月～2026年3月)へと展開することとなる。

### (2) 日本紀関連叙述の問題

日本紀関連では、以下の2本を中心に考察を進めた。

- ・「室町期における中国史書研究の背景—『史記抄』が繙く日本紀の世界—」(日本文学 70-6、2021年6月)
- ・『舜旧記』にみる梵舜の日本紀へのアプローチ—吉田家の学問活動の一齣として—(愛文 57、2022年3月)

前者では、『史記抄』内に見える日本紀の解釈を抽出し、中国史書と日本紀とが密に結び付けられている様を明らかにした。扱う対象は『史記』の注釈書ではあったが、『三国志』享受にも通ずる現象を見出すことができたことから、間接的には日本紀と三国志との接点を探ることともなったかと思う。

そして後者においては、室町末から江戸にかけての事情について、日本紀の家とされる吉田家の動向について検討を行った。吉田家は清原家、細川家とも姻戚関係となる家であり、そういった室町後期の学者間ネットワークの様を、江戸初期の状況を扱うことで、逆照射することが可能になった。

そして、これら2本の論にも共通するが、日本紀を扱う上で、漢籍が随時引き出されていることは間違いないことも見えてきたのであって、その意味では本研究課題の主軸に据えていた部分に向き合えたと確信する。

### (3) 御成敗式目注釈

室町には『御成敗式目』の注釈が数多く生まれるが、この現象はある意味、室町の学問の有り様の特性をわかりやすく示す事例だと考えられる。一見するに、本研究課題からは逸れるかのように映るかもしれないが、当該時期の全体像を把握する上でも、また漢籍と日本紀の接点を探る上でも、相当の意味を持つものであるのは間違いないため、御成敗式目注釈についての考察についても重点的に行った。

まず『室町・戦国時代の法の世界』(吉川弘文館、2021年6月)では、「第Ⅱ部 法の諸領域 第

一章「学問と法—清原宣賢と式目注釈—」の執筆を担当し、宣賢の式目注釈の特性について検討し、注解に漢籍を積極的に用いるなど、他の作品に対する注釈書と同様の志向が見出せるのであって、本研究課題で取り組む問題とも連動することを示し得たかと思う。

またそれに続けて、日本紀をも含めた史観の問題について検討するべく、「北条泰時と『御成敗式目』—無住の説話と式目注にみるその評価の変化—」（第71回愛媛国語国文学会 2022年11月6日）の口頭発表を行い、さらにその発表の中から式目注釈に限定する形で、「北条泰時と『御成敗式目』—『式目』注にみるその評価の変化—」（愛文58、2023年3月）の論を執筆した。

尚、この他にも、『よくわかる日本法制史』（ミネルヴァ書房、2023年刊行予定）にも「御成敗式目の注釈学—“今”を読み解くための過去の法令」というコラムを寄稿し、式目注釈の有り様についての解説を試みた。

このように、式目注釈を軸として、室町期の学問事情についての考察を深めることに成功した。

#### (4) その他注釈関連

上記(1)～(3)以外の室町の学問に関する成果をまとめておく。まず、「室町期における医学・医書受容の—様相—五山僧が繋ぐ知のネットワーク—」（京都大学人文科学研究所「日本鍼灸医術の形成」研究班 2021年3月21日）において、当該期において、五山僧が文学研究に医学的知識を取り込む様を確認した。「取り込む」と便宜的にまとめたが、実のところは現代のような学問の境界が明確となっているわけではなく、医学に対しても門外漢といった意識を持たずに知識を得ていた面もあり、それが学問を発展させていくことにつながっていることを示唆した。

キリスト教伝来についても考察を加えた。それが「中世の思想・学問の捉え直しの契機としてのキリスト教—その伝来、そして既存の学問との接点—」（古典遺産70、2021年6月）である。というのも、宣教師たちがやってきたのが室町末期に当たり、その宗教の伝来、布教にあたっては、既存の宗教、学問との比較、それによってキリスト教の優位性を示すということが積極的になされており、そこに中世日本紀、日本紀注釈に相当する説も多分に用いられているのである。つまり、このキリスト教の伝来について考察することで、日本紀注釈の展開の—様相—を探ることにもなる。結果、本研究課題とも関連する問題となるのである。

尚、2017年11月に刊行した拙著『室町の学問と知の継承 移行期における正統への志向』（勉誠出版）が絶版となって数年経過していたのだが、2022年11月にオンデマンド版として再度刊行された。本研究課題とも連動する内容も多いため、この時期に再版となったことの意味は大きい。

#### (5) 今後の継続課題としての国際シンポジウム

成果として挙げるのは不適切かもしれないが、やはりこの3年間を振り返る上では、きちんと記録をするべきと思う、実現できなかったものについても、その理由とともに書き留めておく。今後の反省材料にもなるとして機能させることができれば、それもある種、今回の課題の成果とすることもできるだろうか。

本研究課題遂行にあたってはその期間すべてがコロナ禍と重なることとなった。特に研究に着手する初年度がまさにコロナ禍1年目に当たり、様々なことに制限がつく状態となっしまい、当初の予定通りに研究を進められないところが多々あった。その中であっては、当初打ち立てていた3つの研究手法のうち3つ目に相当する、国外の研究者と連携をした上でのシンポジウム開催というのは非現実的であり、断念せざるを得なかった。もう少し時期が違えば、遠隔での開催などの方向性も考えられたのかもしれないが、本人の技量の問題もあり、研究期間のうちには実現にはこぎ着けられなかった。しかし、この国際シンポは本研究課題の枠を超えて非常に重要なものとなると考える。よって、今後の継続課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田中尚子	4. 巻 58
2. 論文標題 北条泰時と『御成敗式目』 『式目』注にみるその評価の変化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 愛文	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中尚子	4. 巻 11
2. 論文標題 学会時評 中世	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アナホリッシュ國文學	6. 最初と最後の頁 182-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中尚子	4. 巻 70(6)
2. 論文標題 室町期における中国史書研究の背景－『史記抄』が繙く日本紀の世界－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中尚子	4. 巻 70
2. 論文標題 中世の思想・学問の捉え直しの契機としてのキリスト教 その伝来、そして既存の学問との接点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古典遺産	6. 最初と最後の頁 99-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中尚子	4. 巻 57
2. 論文標題 『舜旧記』にみる神龍院梵舜の日本紀へのアプローチ 吉田家の学問活動の一齣として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛文	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中尚子	4. 巻 70
2. 論文標題 室町期の学問と教育 五山僧・公家学者による古典探究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛媛国文研究	6. 最初と最後の頁 33 - 43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中尚子
2. 発表標題 北条泰時と「御成敗式目」 無住の説話と式目注にみるその評価の変化
3. 学会等名 第71回愛媛国語国文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中尚子
2. 発表標題 室町期における医学・医書受容の様相 五山僧が繋ぐ知のネットワーク
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所「日本鍼灸医療の形成」研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

## 〔図書〕 計3件

1. 著者名 田中尚子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 386
3. 書名 室町の学問と知の継承（オンデマンド版）	

1. 著者名 松園潤一郎編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 292
3. 書名 『室町・戦国時代の法の世界』（本人担当箇所：第 部 法の諸領域 第一章 学問と法—清原宣賢と式目注釈 担当）	

1. 著者名 小助川元太他編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 223
3. 書名 『アジア遊学 室町前期の文化・社会・宗教』（本人担当箇所：『三国伝記』が伝える室町期の三国志受容担当）	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

愛媛大学法文学部日本文学研究室 ウェブエッセイ  
<http://jllab.ll.ehime-u.ac.jp/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------